

「全学共通カリキュラムの新段階」

全学共通カリキュラム運営センター部長 庄 司 洋 子

全学共通カリキュラム全面実施から4年目となる今年度は、全カリ教育の卒業生を初めて送り出すいわゆる完成年度にあたります。このような時期に、大きな戸惑いとためらいをもって私が部長をお引き受けしてから、はや3ヶ月になりました。不慣れな仕事に取り組みつつ、全カリ運営に注ぐ関係教職員の時期とエネルギーの膨大さに日々圧倒されています。言語・総合両部会長や専門委員・特別教務委員のご苦労はいうに及びませんが、各学部運営委員、研究室主任、研究室員、事務室職員の背にも周囲からいたわりの視線が注がれているのを感じるのは私ばかりではないでしょう。こうした貴重な貢献を最大限に活かすために努力しなければならないのは当然ですが、一刻も早く諸課題を軌道に乗せて、全カリ運営に関わる教職員の負担軽減をはかることも、私に課せられた重要課題の一つであると受けとめています。

これまでの全カリ展開過程を振り返ってみますと、全カリを産み出すための議論と作業に明け暮れた第1ステージ、全カリ全面実施を通じてその理念と実践を全学に浸透させるために精力を傾けた第2ステージが終わり、現在はこれらを踏まえた第3ステージに入ったといえると思います。この第3ステージでは、全カリ推進派と称されるような一部の特別な人たちの力量によってではなく、私も含めてごく当たり前に全カリを担おうとする人たちの役割遂行によって、その運営が安定的に維持されるようになりました。ここに至る索引力となってきた全カリ専門家ともいえる人たちの叡知は、全カリ運営組織を通じてかなり成功裡に多くの人々に共有されてきています。とくに、各学部において運営委員経験者が増えるにつれて、否応なしに全カリ運営の現状と課題が全学に伝わることになりました。各学部における議論や部長会でのやりとりを通じて、全カリを真に全学で担うための条件整備とルール化がすすみ、実施当初のような苦労は大幅に緩和されています。そうした蓄積を踏まえて、今年度、初めて各学部で専門と全カリとの統一的なガイダンスが実施されたことは、いろいろな意味において重要な意義ある一歩だと思っています。このように、第3ステージでは、全カリ充実を前提とした静かな永久運動として、さりげなく着々と新しい試みが展開されるでしょう。当面の課題として、総合教育関係では、2001年度カリキュラムの確定に続いて、2002年度以降の総合A科目の専任担当ルールや新座学部での科目展開等に取り組み、言語教育関係では、2001年度カリキュラムの検討に並行して、研究室員の構成をはじめとする懸案の組織問題についての合意形成をすすめます。運営委員会、構想小委員会、主任会等の会議は、時としてみられる利害調整のためのシリアスなやりとり以上に、学部や専門を超えた新たな知見と関係形成に満ちているものと考えたいと思います。激務の代名詞のような全カリ運営の場にこれほど多くのパワーが寄せられてきた理由は、大学教育が現実抱える矛盾を理想によって乗り越えようとする世界に足を踏み入れた時にみえてくる、もう一つの立教大学がそこにあるからではないでしょうか。今後ともいっそうのご協力をお願いいたします。

「立教大学全学共通カリキュラムの記録」(仮題)

近日刊行予定！

同編集委員会 編
発行：東信堂

2000年度 全学共通カリキュラム運営センターメンバー一覧

【運営委員会】

	氏 名	所属	小委
部 長	庄司 洋子 (ショウジ ヨウコ)	社社	
部 会 長	斎藤 宏 (サイトウ ヒロシ)	理化	総合
	白石 典義 (シライシ ノリヨシ)	社産	言語
学部選出	原 好男 (ハラ ヨシオ)	文フ	言語
☆	小河 陽 (オガワ アキラ)	文日	総合
	名和 隆央 (ナワ タカオ)	経経	総合
☆	熊谷 重勝 (クマガイ シゲカツ)	経営	言語
☆	秋山 稔 (アキヤマ ミノル)	理化	言語
	小泉 哲夫 (コイズミ テツオ)	理物	総合
☆	服部 孝章 (ハットリ タカアキ)	社社	総合
	都築 誉史 (ツヅキ タカシ)	社産	言語
☆	佐々木卓也 (ササキ タクヤ)	法政	総合
	佐藤 彰一 (サトウ ショウイチ)	法法	言語
	白坂 蕃 (シラサカ シゲル)	観観	言語
	図師 雅脩 (ズシ マサハル)	観観	総合
	佐藤 研 (サトウ ミガク)	コミ福	総合
☆	福山 清蔵 (フクヤマ セイゾウ)	コミ福	言語
特別教務	青木 康 (アオキ ヤスシ)	文史	
専門委員	藤原 新 (フジワラ アラタ)	経経	総合
☆	坂倉 祐治 (サカクラ ユウジ)	文教	総合
☆	佐藤 邦彦 (サトウ クニヒコ)	社産	言語
☆	山本 博聖 (ヤマモト ヒロマサ)	理物	言語

総合構想小委員会

斎藤 宏、藤原 新、小河 陽、坂倉裕治、
名和隆央、西原廉太、小泉哲夫、吉岡知哉、
服部孝章、柳町朋樹、佐々木卓也、長島 忍、
図師雅脩、荒木 沙、佐藤 研

言語構想小委員会

白石典義、佐藤邦彦、原 好男、山本博聖、
熊谷重勝、鳥飼玖美子、秋山 稔、小松英樹、
都築誉史、小倉和子、佐藤彰一、飯島みどり、
白坂 蕃、舩谷 鋭、福山清蔵、田中 望

【総合教育科目担当部会】

部会長：斎藤 宏

研究室名		氏 名	所属
人 文 科 学	主任	西原 廉太	文キ
		木寺 廉太	文キ
	☆	弘末 雅士	文史
		小山 真紀	文教
		佐々木一也	文教
		横山 紘一	文日
		山田久美子	法法
		下地 秀樹	講教
社 会 科 学	主任	吉岡 知哉	法政
	☆	豊田 貴夫	文史
		鈴木 秀一	経営
		山田真茂留	社社
		橋本 博之	法法
自 然 科 学	主任	柳町 朋樹	理物
	☆	堀 耕治	文心
	☆	宇澤 達	理教
	☆	漆山 秋雄	理化
		栗原 謙二	理化
		上田 恵介	理化
情 報 科 学	主任	長島 忍	経営
	☆	芳賀 繁	文心
		郭 洋春	経経
	☆	真島 恵介	理化
		山口 和範	社産
	☆	島田聡一郎	法法
		泉本 利章	観観
		西田 修	観観
		小林 悦雄	コミ福
ス ポ ー ツ 健康科学	主任	荒木 沙	コミ福
		藤井 陽江	コミ福
		松尾 哲矢	コミ福
		濁川 孝志	コミ福
		沼澤 秀雄	コミ福
		関口 良輔	コミ福
		田中 幸吉	コミ福

☆印は2000年度新任

【言語教育科目担当部会】

部会長：白石 典義

研究室名		氏 名	所属
英 語	主任	鳥飼玖美子	観観
		渡辺 信二	文英
		三浦 雅弘	文英
		高山 一郎	経経
		P.H.アラム	経経
		山本 博聖	理物
	☆	平賀 正子	社社
		阿部 珠理	社社
	☆	久米 昭元	社産
		J.ショールズ	社産
		実松 克義	社産
		鳥飼慎一郎	法法
		M.カプリオ	法法
		P.カニングハム	観観
		野田 研一	観観
ド イ ツ 語	主任	小松 英樹	社社
		小島 康男	文独
		原 克	文独
		高橋 輝暁	文独
		前田 良三	文独
		斎藤松三郎	観観
		宮内敬太郎	コミ福
フ ラ ン ス 語	主任	小倉 和子	観観
		原 好男	文仏
		前田 英樹	文仏
		細川 哲士	文仏
		山本 顕一	社産
		宇野 邦一	法法
		中島 弘二	コミ福
ス ペ イ ン 語	主任	飯島みどり	法法
		佐藤 邦彦	社産
		野谷 文昭	法法
中 国 語	主任	舩谷 鋭	社産
		呉 悦	経営
		谷野 典之	経営
	☆	細井 尚子	社社
諸 言 語	主任	(白石典義)	社産
日 本 語	主任	田中 望	観観
		沖森 卓也	文日
	☆	北山 晴一	文仏
	☆	五十嵐暁郎	法政

※1

※2

※1 10月着任
※2 言語部会長の兼務

総合教育カリキュラムの改革

総合教育科目担当部会長 斎藤 宏

2001年度の総合教育カリキュラムは、全カリ実施後最初的大幅な改革として池袋校地のカリキュラムを中心に取り組み、ほぼ骨子が出来上がりました。

今回の改革の主な目的は、全カリ発足時に積み残した諸問題ならびに実施後に明らかとなった問題点を解決することであった。この観点から改訂、実施される具体的な項目およびその内容は以下の通りである。

1. 総合A群科目の見直しと「多彩な科目」の設置

一般教育時代からの継続に過ぎないとの批判もあった総合A群科目を、3年間の実施経験を踏まえて全面的見直しを行った。特に開講科目を厳選し、総コマ数を280コマに絞り、個々の授業の質の向上を目指すこととした。次に、学生の履修に資するため、科目名に系統性を持たせ、さらに「科目定義一覧表」を作り、科目のねらいや定義を明確にした。演習科目は、学部、学年を越えた全カリならではの演習の意義を認め、全てのカテゴリーに総計22コマ配置した。A群改革の目玉として「多彩な科目」40コマの設置がある。これはA群の中に立教大学としての特色を持たせた科目や、時事的なトピックを扱う科目を配置することにより、カリキュラムの多様化と現代化、また学生のニーズに応えるものである。この中には「立教科目」と「時事科目」の2つの区分を作り、それぞれ特色ある科目区分として展開する。

総合A群 280 コマの内訳

カテゴリ	定常講義	演 習	小計	多 彩	合計
1	44	5	49	立教科目 25	
2	67	5	72		
3	34	4	38		
4	50	4	54	時事科目 15	
5	17	2	19		
6	6	2	8		
小計	218	22	240	40	280

2. 総合B群の発展と充実

開始以来総合B群科目は高い評価を受けており、複数教員の協力による授業という特徴をより発展させていくこととした。科目提案部局の研究所および事務部局への拡大、学部、教育研究室からの提案ルール、TA枠の保証、および総合構想小委員会の中に担当委員を置いて、授業の企画運営を円滑に行うことなどを実施する。

3. 情報科目の充実

新設のメディアセンターとの協力により、全カリの情報科目34コマの充実をはかる。情報科学3, 4, 5の学部への返却。

4. スポーツ実習種目の充実

2000年度に新設されたスポーツスタディ（2単位科目）を含めた実習科目の充実を図る。

5. 履修規程の統一と単純化

池袋5学部の卒業要件単位を20単位にそろえる。また表に示すように、学期あたりの履修登録単位数制限、および同一科目の重複履修制限を単純化し、学生の計画的履修を促す。

6. 専任担当ルールによる全カリ総合科目の展開

全学で担う全カリにとって、これは必要な要件である。今回は池袋5学部専任教員の総合A群（池袋）だけのものであり、しかも2001年度に限られている。しかし、このルールが大学総長から出され、全ての学部から認められたことは画期的であり、今後の全カリ総合科目の展開に明るい見通しがえられた。

7. 武蔵野新座校地のカリキュラム改革

2001年度は総合Bの増設を行う。学部創設4年を経過した2002年度にはカリキュラムの全面的見直しと池袋との融合を図る改革を目指して行きたい。

学生諸君へ

今回のカリキュラム改訂の趣旨を十分理解し、全カリ総合科目を計画的かつ意欲的に履修されることを望みます。

学期あたりの履修登録単位数制限

学 年	総合A	総合B	情 報	スポーツ
1～4年次	2			
上限単位数	合計 8			

同一科目の重複履修制限

	総合A	総合B	情 報	スポーツ
同一科目の重複履修	不可			
卒業要件単位	最初に修得した1科目のみ			

8号館新LL教室の利用方法紹介

新8号館5階にLL教室が6室開室されました。言語教育科目の授業では、この4月からこれらの教室を多種多様に、活発に、利用しています。

●立教大学英语教育におけるLL施設利用について

英語教育研究室R&L教材開発グループ・チーフ

野田 研一

立教大学では2000年度より、新築された池袋キャンパス8号館内で6教室のLL対応施設が稼働を開始した。現在望みうる最高水準にあるLL機器が備えられた教室では、Audio/Visual両面からのより充実した語学教育が可能となったのである。また同時に、武蔵野新座キャンパスのLL用2教室も同一内容の設備に更新された。

LL設備は、音声や画像素材を機械的に提示することを容易にしてくれる。また、一斉授業でありながら、機械的な処理によって「個別学習」的な環境を創り出し易いなどメリットが多くある。だが、実状は、めざましいというほどの稼働率には至らず、場合によってはただの教室、さらには自習用教室としてしか利用されていないというケースも少なくない。

稼働率が上がらない理由は、教員の機械に対する苦手意識だけではない。そこで行われる教育内容が適切かつ十分にオーガナイズされていないからである。ソフト面でのオーガナイズがなされない限りは、ハードの利用はきわめて局所化されたものにならざるをえない。

英語教育研究室では、全カリ元年の1997年以来、新しいLL設備の充実に向けたさまざまな提案を行うと同時に、まず何よりもソフト面でのきちんとした対応をめざして準備を進めてきた。具体的には、LL教育を効果的に可能にする独自教材の開発である。現在授業展開している英語科目のうち、言語文化コースのReading & Listening (週2回)を教材開発の対象として絞り込み、以降2年余にわたる開発作業に着手した。

この教材開発の最大のポイントは、LLを利用したリーディング授業という点にある。一般的にLL利用

といえば、リスニング、あるいは発音・対話練習といった「会話的」要素の強い科目が想定されるが、研究室ではこれまでほとんど考慮されなかったリーディング指導に注目した。それは最新のLL機器がビデオなどビジュアルな機能を格段に強化しており、これを有効に利用することがLL授業の将来像を決めるものと考えたからである。

その結果、開発されたのが *Information, Please!: Speed Reading & Authentic Listening* (松柏社刊) という教科書及びビデオである。この教材ではリーディング能力、とりわけ速読能力の強化のために、速読をうながすスキルを具体化し、それをビデオ画像によって視覚的に提示することに重点を置いた。リーディング・プロセスに内包されている推測、ポイントやトピックの把握、キーコンセプトの確認、文やパラグラフ構造の素早い把握などを意識化させるために、ビデオによるスキル提示の形で示すと同時に、練習問題化してゆく。

授業内容に関していえば、ここでスキル化されている事柄はかならずしも目新しいものではない。ただし、これまで少なくとも日本で発売されている教科書でこれほどまでにリーディング・プロセスを体系化し、スキル化した例は少ないであろう。このようにスキル化すなわち具体化された教材を通じて、教員側もこれまでなかば未整理なまま教えていた内容をより明確な輪郭をもった形で学生に伝えることが可能になる。

この4月から言語文化コースの学生約2,000名が、新設LL教室において、新しいReading & Listeningのクラスを受講している。自分の能力に応じて選べる4スピードの画面、ポイントや着眼点を的確に指示するハイライト画面、さらにネイティブ教員によるビデオレクチャーなど、いわば21世紀仕様のLLソフト開発によって、LL利用の可能性は一層高まったといえる。



●授業における新しいLL教室の利用方法

—AV機能を中心に

中国語教育研究室主任 舩谷 鋭

4月にオープンした新8号館の5階は6室のLL教室で満たされている。コンピューター教室が並ぶ他の階と違い、授業の他はひっそりしている。各教室とも

48席の学生ブースは仕切りのない、モニタ埋め込み式の平らな机で、一見LLブースとわからない。教員は4階の準備室でマスターコンソール (Sony LLC-9000) のカギを借りて上がってくる。教師卓モニタ右側面にカギを差し込み、自動車のキーの要領で奥までひねれば電源が入る。学生が「ATTENDANCE」(出席)ボ

▶ 履修相談室が大盛況

4/10(月)に開催された履修相談室では、相談者(学生)が例年以上に押しかけ大繁況のうちに終わりました。今年度からは全カリに加え専門に関する履修相談にも対応しました。それに併せて、全カリ総合・言語の各研究室だけでなく各学部の専門教育科目担当の先生方にもご協力いただきました。



▶ スポーツ実習の新たな取り組み

スポーツスタディ

実習と講義が一つの科目の中で展開される2単位科目が登場しました。からだを動かすと共に、スポーツの歴史的・文化的背景を学んだり、健康維持増進のためのノウハウ等を学習します。

(科目名)

ダイエット・フィットネス、トレーニング、リハビリテーション・コース等

スポーツ実習の新種目

スポーツ実習科目にも新たな種目が加わりました。

(科目名)

インラインスケート、フットサル、太極拳、マリンスポーツ、アウトドアキャンプ、スキー&スノーボード等

▶ 全カリガイダンスが学部ガイダンスへ移行されました

昨年までは新1年次生に対して独自に開催していた「全カリガイダンス」ですが、今年から各学部ガイダンスの中で全カリ学部運営委員の先生により説明が行われることになりました。担当の先生方に対しては全カリ教務委員会主催による事前研修会が行われました。

LL Topics

タンを押せば準備完了だ。教師卓モニタには出席者の座席番号が續々と点灯する。

見渡すことのできる教室環境だから、AV教室としても快適だ。教師卓上の教材選択パネルで一番上の[モニター/事前準備]の行から[書画]ボタンを押せば書画カメラが使える。切手大のものを拡大したり、ネガを反転して映したりもできる。ビデオを見せたければ、一番上と一番下の行から[VHS1]ボタンを選べばよい。教師卓下の4台のビデオデッキうち、一番下の[VHS4]なら全世界対応だから、PALなどのカラー方式も再生可能だ。いずれも学生の手元に映し出される。卓上のマイクを使いたければ、教師卓モニタ下の[一斉呼びかけ]ボタンを押せばよい。

このように新LL教室では、学生に話しかけながら書画カメラで資料を見せたり、一緒にビデオを見たりという、普通教室利用から連想できる講義形態が行える。さらに、電源もボタンも一切触らなくても新教室は使える。4階準備室でワイヤレスマイクを借りれば、コンソールの電源にかかわらず教室スピーカーから声が流れる。

さて、肝心のLL機能の利用だが、池袋キャンパスでは旧LL教室の利用が非常に少なく、立教の機器利用の語学教育への取り組みは、一部を除いて盛んだったとは言い難い。そもそもLLを利用する必要があるかという素朴な疑問も聞こえてくる。

LL(Language Laboratory/Learning Laboratory)の定義として“多様な視聴覚教材を利用して「聞く」「話す」練習を「集団(一斉)」「グループ」「個別」学習する施設」とあるが、アメリカでの機器利用教育に刺激を受けた1961年の語学ラボラトリー学会(現外国語教育メディア学会)の設立、1964年の国内初のLL

教室設置など、40年近い日本におけるLL教育の歴史を繙けば、「テープレコーダー(音声再生機器)1台あればLL」と言えるのではないだろうか。だとすると普通教室にテープやCDを持ち込んで聞かせたりする試みもLLの延長線上にある授業形式だ。

一般にLL教室において利用頻度の高い機器としてテープ、書画カメラ、ビデオが上げられる。利用頻度の高いボタンとして[モニター][一斉呼びかけ][通話][一斉録音][ペア][モデル]などがある。各ボタンの機能、操作については準備室に用意されている「ベーシックガイド」をご覧ください。教師はLLで提示型、ドリル型あるいは評価診断型の教材を一斉、グループ、個別学習などの学習形態で利用する。結果として、学習者中心で能力別に多様なメディアを利用でき、学生個々の毎回の参加状況を把握しやすいことが特徴となる。もちろん、提示教材の多様化が消化不良を招いたり、学生の疲労度が普通教室より高いことなど、配慮すべき点も少なくない。

実際に新教室を使っていると、前方に大写しできる仕掛けがなかったり、書画カメラと音声と同時に使えなかったり、旧LLにあったアナライザー機能が省略されていたり、不満な点もいくつか出てくる。しかし今回のLL導入が、立教にとって機器利用の教育を根付かせるための第一歩として大きな意味を持つことは間違いない。MDやDVDなど、学内で最も多彩なメディアが利用できる教室は新LL教室である。まずAV教室として利用し、上記のLL機能ボタンも使えるものから試してみる。そうした段階的な機器利用が行われれば、CALL教室などのより多機能な環境へのステップとしても意味を持つだろう。

「英語インテンシブ」レベル2を修了して

昨年度末、週4回授業の英語インテンシブ・レベル1およびレベル2を2年間にわたり履修し初めての修了生となった6名の中から、渡辺さん、阿部さんにその手応えを語ってもらいます。

文学部英米文学科4年 渡辺 雅己

インテンシブの授業を二年間受けつづけたことは英語の苦手な私にとって非常に大変なことでしたが、インテンシブを受ける前と今の自分の英語力を比べてみて、十分とはいえませんが自分なりに向上してきたのかなと思う今日この頃です。

私は英語が本当に苦手で、はじめてインテンシブのクラスに出たころ、先生の話すことがほとんど理解できなかったの、先生に直接質問されてもただあいまいに微笑を返すだけの典型的な英語のできない生徒でした。逆にまわりのクラスメイトはそれなりに先生と受け答えをしている、だからいつも恥ずかしい思いをしていました。また、インテンシブの授業は準備をするのが大変で、予習の大部分をインテンシブのために割きましたが、せっかく時間をかけて作ったレポートが認められなかったり、プレゼンテーションに失敗したりで悪戦苦闘の連続でした。特にプレゼンテーションが苦手で、はじめ5～10分だったものが最後には90分任されるという始末で数週間前からずっとそのことで気分が重かったということもありました。そんな状態が続いたわけですが、怠けようとする自分に「痛みを伴わなければ何も得ない」と言い聞かせながら授業に出て失敗を繰り返すうちに、先生やクラスメイトが何を言っているのか大体わかるようになり、失敗に対する反省や先生のアドバイスもあってレポートやプレゼンテーションもそれなりにすこしずつできるようになりました。そうして英語力がついてきたんだという実感を少しずつ持つようになりました。

インテンシブのクラスは他の授業と違い、みんなで和気あいあいとやる雰囲気があって、朝一番の授業や土曜の午後の授業であっても毎回出るのが楽しみでした。また、一年通して扱うテーマが大変興味深く、そういうテーマを深く掘り下げてみて、単なる勉強というのではなく、自分の考え方に大変影響を与えられたということもありました。

そして私が二年間がんばり通すことができたのは、周りのクラスメイトたちの英語に対する意識の高さと意欲に刺激を受けたこととゼロからのスタートだった私を寛容に見てくださった先生方のおかげだと思います。

経済学部経済学科4年 阿部 容子

去年の4月、私の「英語インテンシブ・レベル2」受講の生活が始まりました。今振り返ってみると、週4回あるこのクラスは私にとって決してやさしいものではありませんでした。しかし、私に大きな影響を与えてくれたとても大切な存在になったと思います。なぜなら、このクラスは英語においてのプレゼンテーションスキルやアカデミックリサーチペーパーの作成スキルを学ぶだけではなく、英語を使って1つのトピックやそれに関連する時事問題への理解を深め、それに対する自分自身の考えを持ちその意見を交換する事を通して、クラス全体でさらに理解を深めていく事ができたからです。教育問題をトピックとして扱ったときに日米の教育比較を行い、実際にアメリカ出身の先生や交換留学経験者にインタビューをし、ディスカッションした事もありました。また、国際結婚における異文化問題を扱ったときには、クラスメイトの1人が国際結婚をした御夫婦をクラスに招待してくれたので、実体験に基づく貴重なお話を聞くことができました。その後、みんなで熱い議論を交わした事を今でも鮮明に覚えています。様々な専門分野・学年で構成されているクラスでのディスカッションは、他の授業では体験できない貴重なものだと思います。

もちろん英語インテンシブクラスは自分自身の英語力に対しても大きな影響を与えました。私は決して英語が得意だったからこのクラスを受講したのではなく、英語が好きだったから、もっと向上したいからという理由で履修したので、授業の間は「日本語だったらもっと自分の意見が的確に言えるのに」と何度も何度ももどかしい思いをしました。しかし、このもどかしさが私の英語に対する向上意欲を常に高めてくれているのだと思います。

最後に、学生に対して主体性を尊重しつつも素晴らしい御指導をくださった鳥飼玖美子先生とオルネラ・スズキ先生、また、お互いを刺激しながら共に学んできた大切なクラスメイトにお礼を述べたいです。ありがとうございました。

人文科学教育研究室主催 人権授業開発研究会報告

「— 徐京植先生講演 —大学の人権教育に望むこと」

人文科学教育研究室主任 西原 廉太

去る2月23日に、全カリ人文科学教育研究室主催で人権授業開発研究会を開催した。今回のテーマは、「大学の人権教育に望むこと」。講師には、立教大学で全カリ総合A科目「人権とマイノリティー」をご担当いただいた徐京植先生をお迎えした。私たち全カリでの人権教育がどのような方向性を持つことが望ましいのか等について、昨年度で立教へのご出講を終えられた徐京植先生から総括的なご提言を最後にいただくという主旨である。当日は約30名の教職員、学生が集まり、熱気に包まれた講演会となった。徐先生の実存を賭した、魂を揺さぶられるようなそのお話を、文字で再現することは不可能に近いが、ここにその一端をご紹介します。

徐先生の、立教をはじめとする大学の教壇での経験を一言で言うならば、それは「断絶の経験」とであるという。徐先生は「言うのはつらいのですが」と前置きされながら、昨年度の立教全カリ授業での実例を紹介して下さった。先生は授業の中で、成績評価外であるので差し支えがあれば無記名でも良い、という条件でアンケートを取られる。するとある時そこには、「金返せばか」と書いてあったという。一旦書いた名前を消しゴムで消してあった。「私は相変わらずナイーブでした。教員などやるものではないと立ち往生しました」と徐先生は言われる。「彼らはもう大人で、自分自身の意志で科目を選択し、『人権とマイノリティー』という科目を学ぶ気があって来ていて、しかも私が朝鮮人であることを知っていると、他者として知っているという前提があるのですが、その前提がすべて壊されるのです。『金返せばか』という言葉で。ぐっと押さえて10数回講義をした後に、学生たちとこのことをどう思うか、という話をしました。学生たちの反応は何をそう深刻に捉えているのか、彼は笑いを取ったかっただけでしょう、というものでした。理解しない。この内向きな甘えの構造が他者と出会った時にどうなるのか。そのことを話してきたのにです。」

またこのような例も紹介された。やはり立教大学でのご経験である。戦前立教にも留学し、日本で獄死した詩人、尹東柱の詩を取り上げられ、学生に感想を書かせた。その中に、「貧乏くじを引くことはある」と

いう主旨のものがあつた。弱肉強食を肯定する学生。徐先生は絶句されたという。一方でその年度の期末レポートにこのようなものがあつた。「この尹東柱のすずしげな一重瞼の横に自分の学生証を置いてみる。自分の目と良く似ている。実は私も尹東柱と同じ血を引く者だ。しかしそのことを言う勇気がない。」彼女は在日であることも、本名を明かすこともできずにその場にいた。「貧乏くじ」という学生と本名を名乗ることもできない学生が同じ教室にいる現実。彼女は徐先生にも自らの存在を打ち明けられないまま、卒業し、社会に入ってしまった。その後どうなったのかは分からない。

「大学教育の限界ですね」と徐京植先生は言う。学生たちだけではなく、私たち教員の意識、有り様も同時に問われる。徐京植先生には1996年に立教大学で講演をさせていただいているが、その講演が持たれたのはある立教の政治学の教員が、外国人学生に対して、日本籍に帰化して一流企業に入ればいいじゃないかと発言したことが契機であった。その学生が人権センターに相談を持ちかけたことがきっかけとなった。徐先生は、他者があり、その人との間に当然あるべき緊張感や敬意、一つの言葉を口に出すまでにやらなければならない最低限の努力というものをすべて省略した事件であったと総括される。

最後に徐京植先生から貴重な提言をいくつかいただいた。その一つは、「人権関連科目担当教員のネットワーク」である。立教大学内ではもちろん、さらに大学の垣根を越えて、人権を主題とする科目を担当している教員たちが情報を交換し、互いに支え合うネットワークの構築である。第二には、他者への構想力を育めない状況は中学・高校の段階からあるのではないか、という問いである。これについては立教の場合、一貫連携教育の内実を人権という視点から充実させていく、ということになる。最後に、学生たちが他者と向かい合い、他者の痛み想像力を施せ、対話が可能な人間に育っていくための教育を徹底して大切にすることを挙げていただいた。そのためには、人権に関する科目として特化し、専門化するのではなく、文字通り、「リベラル・アーツ」と呼べる科目をさらに増やし、また、そのような科目を減らそうとする力に抗するこ

とが必要であると締め括られた。

私たち立教大学の教育に携わる者たちにとって、徐京植先生のお話は大変に重いものであると同時に、いかに人権教育、リベラル・アーツの視点が重要である

かを改めて思い知らさせる内容であった。現在、全カリはカリキュラム改訂に取り組んでいるが、徐先生から示していただいた方向性をぜひとも大切にしていきたいと思う。
(2000.2.23開催)

ワークショップ報告②

自然科学教育研究室主催

ワークショップ：21世紀の大学における自然科学教育（1）

大学における生物学教育

自然科学教育研究室主任 上田 恵 介

21世紀を目前にひかえ、科学技術の発展はとどまるところを知らないように思える。しかしその一方で、日本の子供達の自然科学に対する関心・理解は、世界各国で実施された「地球の中心は熱いか、冷たいか」とか、「原子と分子はどちらが大きいか」などのごく常識的なアンケートへの回答の集計だけを見ても世界の最低レベル（先進14カ国中13位）にあり、しかも悪化の一途である。また昨年（1999年）の東海村の臨界事故で、現場作業を行う人たちに、臨界とはなにかの基礎知識さえなかったことに、自然科学の教育現場にいる人たちは衝撃を受けたのではないだろうか。

“科学技術大国”と言われる日本の、これが現状である。それはすでにこの国の多くの人々が漠然と感じていることではないだろうか。遺伝子診断やクローン技術にしても、多くの人々が懸念を抱くのは、こうした生命に関わる高度な技術を、我々ははたして正しく用いることができるのかという不安があるからである。どんな技術も、人間に使われたとき、それは使い手の都合によっていかようにも変容しうる危険を秘めていることを私たちは知っている。科学技術の特権化や暴走をくい止めることができるのは、広く広範な人々が、科学に対して正しい目を向けることしかない。

ここにおいて、大学の存在意義がクローズアップされてくる。学生たちが卒業して、民主的な市民社会（日本がそうであるかは私は知らない）の担い手として、社会に出ていくとき、単なる知識ではなく、人間にとって科学とはなにか、科学的に思考するとはどういうことかということについて、しっかりした考えを身につけていることが必要であるのはいうまでもないだろう。大学における自然科学教育の重要性はまさにそこにあると思われる。自然科学の専門知識のみを教えるのではなく、自然科学と我々はどうかつきあっていくかを学ぶこと、それが全カリ自然科学教育の目的である。

全カリ自然科学教育研究室では、この趣旨のもと、

21世紀の大学における自然科学教育はいかにあるべきかを考える連続ワークショップを計画した。ワークショップを計画した意図は、この試みを通じて、立教大学の全カリ自然科学教育のカリキュラムへの新しい視点を提供し、全カリ自然科学教育に関わる教員の教育技術を含めたFD（faculty development）の向上に役立てることである。

今回はその第一回として、生物学教育を取り上げた。講師は玉川大学教授の松香光夫氏。氏の専門は応用昆虫学、雑草学だが、日本生物教育学会副会長として、生物学教育全般にわたって、幅広く活躍されている。

ワークショップは1月29日、7号館3階会議室で斎藤全カリ総合部会長ほか、専任4名、非常勤講師6名の参加で開催された。松香氏はアメリカの生物学シラバスを例に、日本とのシラバスの比較を論じられた。立教大学でも全カリ発足にともないシラバス充実についての議論がなされ、それなりに充実した講義要項がつくられているが、いわゆるアメリカでいうところのシラバスとは、内容的にも、分量的にもかなり異なるものであることが、シラバスの実物を回覧しての松香氏の説明に、参加者の理解が深まった。

またアメリカの大学ではシラバスは学生と教師のある意味での“契約”であり、その意味で、FDにとっても非常に重要なものである点が、日本とは異なっているとの指摘があった。基本的に学生が大学において身につけるべき知識・技能としてのエッセンシャル・ミニマムはあるのか、教養としての生物学と基礎としての生物学の違い、また当該科目のカリキュラム上の位置付けがなされているのかなど、大学における自然科学教育のあるべき姿について、かなりの議論が深まった会であった。

ワークショップは、次回以降、物理学、化学、地学、数学と、自然科学諸分野の教育について、開催される予定である。
(2000.1.29開催)